

第8回 日本生殖内分泌学会学術集会



会長

貴邑 富久子

横浜市立大学
大学院医学研究科
神経内分泌学部門
教授

標記学術集会は、日本生殖内分泌学会の年1回の行事として、去る2003年11月29日(土)、みなとみらい・パシフィコ横浜会議センターに於いて開催、無事終了しましたことをご報告いたします。

発表演題数は、一般演題が48題、特別講演が1題、企画シンポジウムと公募シンポジウムが3題ずつで計6題、そしてランチョンセミナーが1題の、合計56題でした。参加者数は、一般123名、学生32名、招待講演者と非会員のシンポジスト3名に我々19名をあわせると、総参加者数は179名に上りました。例年の参加者は200名前後ですので、若干減少したようにも見えますが、これは同じ時期に極めて類似した学会があったことが影響しているだろうとの学会幹事の解析です。

学術集会は一般演題にはじまり、特別講演「女性医療の現場から—なぜ女性外来が歓迎されたか—」ではウィミンズ・ウエルネス銀座クリニック院長の対馬ルリ子先生が、最近流行の女性外来の必要性の理由を解説されましたが、講演後に多くの質問やコメントがなされたことから、参加の皆様には大変有意義な機会であったと確信しました。お弁当を食べながらのランチョン・セミナー「内分泌攪乱物質の男性生殖機能への影響に関する疫学的国際調査—日本のtesticular dysgenesis syndromeの現状—」も聖マリアンナ医大の岩本晃明先生が近年問題となっている内分泌攪乱物質の精巣への影響を話され、一同大いに啓蒙されたことと思います。引き続きニュージーランドオタゴ大学医学部Allan E. Herbison先生、米国コロラド州立大学獣医学部Stuart Tobet先生、そして横浜市立大学大学院医学研究科のDai Mitsushima先生を交えた企画シンポジウム「GABA neurons and reproduction」では、GABAニューロンによるGnRHニューロンの脳内への移動や活動調節に関する先端的な発表がなされ、視床下部GnRHニューロンを調節するGABAニューロンの、胎生期から発達期、成熟個体の性差に至る総合的な役割についての知見を深めたと思います。その後再び一般演題と、公募シンポジウム「内分泌薬の乱用—スポーツの現場から」が行われ、このシンポジウムでは国際武道大学の高橋正人先生、立木幸敏先生、そして河野俊彦先生が、我国のスポーツ選手から一般の人を含めたいわゆるドーピングの問題を基礎から臨床までわかりやすく解説され、大変有意義なものとなりました。

かなりハードな日程となりましたが、ホットな話題が提供され、その結果熱気のこもった討論が行われ、活気のある充実した学術集会になったと自負しております。

最後になりましたが、この会を開催するに当たりましては、青野理事長をはじめ多くの関係者の方々から多大なる御援助を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成16年1月20日